

# COSMOS集



鈴木 千登世選

「あすなる集」特選

透明になる

成田 裕子\*青森

星空に湯気立ちのほる露天の湯しずかに私透明になる  
一晚でつもつた雪を踏みしめてさらに降りつむ空を見上げる  
明日朝はきつと雪かき一時間 ミステリ閉じる切ない深夜  
夜明けより雪かきをする君のため朝のおかずはカレイの煮付け  
朝食にカレイを煮れば前髪は一日醬油の香りがして

ハン・ガンさん

萩原 栄子 埼玉

一冊だけありし書店に購へるハン・ガンさんの『少年が来る』  
重装備の軍が市民を攻めしと言ふ光州事件のむごき現実  
光州事件をひとりびとりに聞きながら心を記すハン・ガンさんは  
焼かれるる遺体の心を伝へくれるハン・ガンさんの鎮魂の文

光州事件から四十四年の戒厳令 ハン・ガンさんを思ひてやまぬ

安全な場所

引間 三郎\*埼玉

じわじわと冷え込む夜の訪問者監視カメラに狸が映る  
わが部屋の一員だったカメムシを小春日の日に放してやりぬ  
ほろ酔いの心地のままでもいい夜手酌の酒はふる里の味  
横目にて吾の行動を監視する女鹿の後に小鹿がおりぬ  
狩猟期の安全な場所知っている鹿の集団公園の中

ガーゼの語源

人見 江一\*神奈川

リュックから葱の緑をのぞかせて家路を急ぐ今日は鍋の日  
インドでは少ないらしい認知症 毎週火曜はカレーを食べる  
空爆に傷つく子らの血のにじむガーゼの語源ガザの地の名は  
カフェインのないお茶を飲み来年も生さるつもりで手帳を選ぶ  
寝てる人スマホ見る人大半の車内でひらく岩波文庫

乾杯

奥 浩昭 東京

ただ一度バスの窓より見しガザの子どもら思ひわれ詠みゆかむ  
解放の日にガザの地に鳴り響くことは字ばむ「乾杯」  
陸の壁海の壁ゆゑその叫ぶ声は届かずガザの地の民  
行くことの終にならむあしねはふうクライナの悲けさまた新た  
一本の白樫の木に出会ひにき国分寺駅北口に来て

水上 比呂美選

つら〜い 清水美里\*東京

空気漏れしている箇所を確かめるたらいの水に脳を沈めて  
あつたか〜いがないのがつら〜いがんばれな〜い自販機くらい優しくあれよ  
無呼吸の胸に右腕まわして稀に沈んでゆくと愉しむ  
冬なのに夜なのに咲いちゃっているアサガオ何も気にしてないな  
使わなくなつて静物画と化した石鹼今日は陰がやや濃い

諏訪の湯小路 藤田邦彦\*東京

諏訪生まれ飯田生まれの男ふたり浜松女に叱られつつ飲む  
道端に積まれた雪の間から湯けむり上がる諏訪の湯小路  
四十五度いい湯加減と嘯いて真っ赤にゆだる諏訪の男は  
誰となく曇るガラスに湯をかけて紅葉の山見渡している  
夕暮れの暗き水面に鳥一羽旋回しつつ見えなくなりぬ

割れぬカップ 阿部直子 新潟

葛藤がきつとあるはず沈下橋流れにのまれ存在を消す  
さくら蓼毎年咲ける線路ぎは厚き防草シート貼られる  
落としても割れぬカップを拾ふ時カワイクナイと一瞬思ふ  
スプーンで軽くたたいて殻を割るモーニングセットのかたため卵  
命には別状なしと古希の脳忘れたころに名を思ひ出す

朱色のサンダル 大沢律子 岐阜

深戸葱、あくだ 安久田こんにやく、小野茄子、名皿部生蒔郡上の名産  
力こめ折れぬやう引く大根の手応へありて今夜はおでん  
キッチンでも台所でもなくお勝手が吾にふさはし大根飯炊く  
小春日の日ざし明るきお勝手はよき居場所にて朝刊ひらく  
来年も元気に歩かむ庭下駄を深き朱色のサンダルとせむ

華厳寺の庭 山田一 岐阜

まひるまに長良回りのバスを待つ四分の間の秋風涼し  
長良川に水切りの石投げ入れてしづかにひとり童心となる  
朝陽さす参道の人まばらなり華厳寺までのもみぢ葉紅し  
ひやかかな空気の底に静もりて落葉のにはふ華厳寺の庭  
谷汲の村の水車に吸はれゆくもみぢの群れは紅をあやなす

斉藤 梢選

クオリティオブライフ 岩館澄江\*愛知

無花果と胡桃と小麦とんとん機械の羽に押されておどる  
おきぬけに焼き立てパンをほおばればクオリティオブライフたかまる  
友だちはわたしに興味ないようでわたしもなくてそれでおしまい  
さようなら馴れ合ったってわたしにはなんも質問ないおともだち  
棚上に座つたままのだるまさん片目で二年わが家を守る

古 障 子 三 浪 治 子 三 重

三時過ぎ空にはかに薄鼠<sup>うすねずみ</sup> 剪定の庭に時雨降りくる  
もう居ない猫が突破の古障子ひらひら揺れて一年の過ぐ  
やうやくに紙貼り終へし障子戸に小春日透きて明るき仏間  
息をするものもう居ないわが家の鍵開ける時大きく響く  
「冬の星座」のピアノに合はせ首まはす東雲時のラジオ体操

十二月八日 沢 田 弘 子 奈良

稲刈りの終へし田畑のそれぞれにひこばえ生えて緑の草原  
ペビーカー押しくる人に近づけばチワワ顔出し散歩中と吠ゆ  
「その歳で一人で来たの」ドクターが聞きくれぬ「三本足で」とわれ  
夢ありし若き命よ開戦日十二月八日淡々と過ぐ  
戦火うけ焼け跡に佇む子の姿戦後の日本の孤児と重なる

大人の遠足 桜 庭 さわね 鳥 取

初めてのリングゴ狩りなり農園は見渡すかぎり夕焼けの色  
誰のものとなるのだらうか艶やかな光を放つジョンゴールドは  
道の駅に觀光バスの止まりゐて波のごとくに客の降り来る  
リユッタサツタにリングゴや野菜詰め込みて大人の遠足帰路のおもたし  
風の声、鳥のつぶやき聞きながら秋を惜しみて山路を歩く

句 読 点 樺 か 乃 広 島

小さくてきゆんと輝く冬の月落葉のやうなわれを見てゐる

うつうつと日々の過ぎゆくけだるさに句読点なす朱の南天  
きやびきやびと騒いだ後の静けさやどつと散り敷く山茶花はなびら  
生真面目な紋様めぐらす蜘蛛の糸今朝は椿にお披露目ならむ  
会へばいつも「ああ忙しい」が口癖のはは浮かびくる師走この頃  
鈴木 竹志選

師 は 卒 寿 矢 木 田 万 起 子 山 口

ひとつ咲く椿の花と見えたるは近づきゆけば白き薔薇なり  
師の卒寿祝ふ歌会は小春日の今年納めの良き会となる  
「香臈人」の森重香代子先生の卒寿の会は「香」を題とせり  
パッシングする対向車この先はさう<sup>ね</sup>ずみ取りするところなり  
早贄と見つめるわれの頭をばばさつと触れて椋鳥はゆく

母 の 死 松 岡 綾 子 香 川

息絶えて母の荷やつと解かれたり半身麻痺と膀胱バルーン  
み棺の死化粧見えて思ひ出す自慢だつたな参観日の母  
目の前の用事あれこれ追はれる枕飾りのお鈴途切れる  
街角のジングルベルがゆりおこす母を亡くした子ども心  
俊太郎様言葉のインフレ嘆きましたねわたくしは今短歌をやつてゐます

ハウステンボス 酒 井 恵 子 \* 長 崎

心地よき小春日のハウステンボス歩き歩いて一万五千歩  
暮れ方のハウステンボスはワクワクのファンタスティックなイルミネーション

電球はLEDというなれど千三百万球は節電か

陶器市で欲しい器はありたれど断捨離最中買わないと決む  
駄目元でプロッコリーの苗植える野菜の高値に抵抗すべく

孤独のグルメ 村上京子\*長崎

テレビってもう何年もつまらないどれを見たって似たり寄ったり  
知らぬ間に洗脳をするテレビだと気づいてしまった捨ててしまおう  
久し振りに炭坑節を耳にして「サノヨイヨイ」をググってしまおう  
この島の焼き鳥屋にてバツタリと「孤独のグルメ」の作者に出会う

そうなれば来春早々封切の「孤独のグルメ」観に行きましよう

気分屋 山崎常子\*長崎

日焼け止めクリーム塗りしことなきを驚かれたりとほき思ひ出  
日焼け止め持つてゐないといふわれに目を丸くせしあの友の顔  
好きな酒飲まなくなりしその訳を誰にも言へぬ言へぬさびしさ  
気分屋といふ語を見つけ思ひをりこれは正しくわたしを指しぬ  
年賀状十年前程止めぬしがまた始めをり気分屋わたし



水上 芙季選 「その二集」特選

きらきら星 佐々木真知子\*宮城

有馬の湯で五十五年のそれぞれを温めている十人の友  
ヴァイオリンできらきら星を弾いていた幼きころの秋の夕暮れ  
やわらかな秋の陽射しのリビングに夫の写真がほほえんでいる  
日が暮れてテレビの前にすわる時帰るはずない人を待ちおり  
クリスマス、正月きらいと言いつ友祭りさわぎの続きのように

夕雁 水鳥葉子\*茨城

贈り物のリボンほどけてゆくやうに母はほほえむ面会の午後  
ミシン踏む母の真白なふくらはぎふと思ひいづ満月の夜  
さびしさはいのちの乾きかもしれず夕雁飛びり稽田の上  
コスモスの揺れ惑ひたる野の空に飛行機雲は直線を引く  
空中に宙ぶらりんと揺れをりて糞虫も今日のひと日を暮れる

バラスト工事 谷真樹\*神奈川

フィルターや加工のきかない現実で薔薇は薔薇ゆえ存在している

激しさに爆ぜた夕日かてらと腑をさらけだす道の落ち柿  
いい人のふりなんてするからだよと黙し見くだす皇帝ダリア  
ひばりヶ丘―志木駅区間のバス停に「別れ道」ありただ通り過ぐ  
眠れずに時計をみれば午前二時バラスト工事の音だけ聞こゆ

讚 美 歌 吉 本 美 加 \* 神奈川

ママ友はみんな聖母<sup>マリヤ</sup>の顔をする子ども<sup>マリヤ</sup>の一番を見とどけたあと  
変身の呪文のように子は歌うシユワキマセリシユワキマセリと  
讚美歌を歌えば届いてしましうまだ見たことのない神さまへ  
「世の中は森羅万象<sup>もろら まんどう</sup>」宿題で吾子は新種のゾウを生み出す  
「信じる」の意味を考えながら切る手のひらの上の絹ごしどうふ

煩わしい視野 松 下 誠 一 \* 東京

わるい夢の途切れてからはつま先の温まらなさばかりを思う  
よわい葉を風はつたつてゆきながら安定剤を舌の根に置く  
夕暮れのなかに目覚めてからすぐに死にたがるあたまを壁に打つ  
ぼさぼさの髪の毛の煩わしい視野に夕闇の水面を入れておく  
流星が見えて同時に声がして僕はひとりの無音をあそぶ

大野 英子選

秋 の 大地 斎 藤 栄 \* 新潟

ロープウェイ乗って十分鳥となる いつも野道のその上翔けて  
小春日のハイキングロード人多しどんぐりあらかた踏みしだかれて

どんぐりがコットンと落ちた森のなか秋の大地がしずかに揺れた  
爪切れば薄紙の上甦ること無き私<sup>わが</sup>がぱらりと落ちる  
銀の穂を打ちなびかせよ野の芒先駆植物のたてがみとして

まぼろしに慣る 上 野 博 之 富 山

旅先の豆入り越前茶に憶ふ祖母の「鉄瓶ちんちん沸いとる」  
幻の洋梨といふル・レクチュエを年々賜り(まぼろし)に慣る  
お互ひの老い眺めつつ慰めつつひと月ぶりの歌会の席で  
終日を指もたつかせ響<sup>しや</sup>めつつ今やスマホに飼はるるわれか  
ごめん、ごめんと雪ダルマ印<sup>マール</sup>の一団が予報天気図に南下し始む

今朝は初霜 森 崎 洋 子 \* 静岡

南瓜<sup>なぐさ</sup>にロックされたる包丁を押したり引いたり途方に暮れる  
蜘蛛の糸に銀杏つかまりくるとバレリーナのごとピルエット踊る  
秋深み公園の銀杏見上げつつしつぽの先から鯛焼きを食む  
自らの光をもつや大銀杏暮れ残りたる山の辺照らす  
ひこばえが葉色となり鳥たちもいつか遠のき今朝は初霜

忘れたふりして 鏡 康 男 \* 三重

穀殻のくすぶる烟りひっそりと柵田の里の秋は深まる  
ふるさとの山は眠らず稜線に吼ゆる風力発電六十基  
青色の人の挿絵に灯がともりどつとあふれる歩道の人が  
「にぎやかな正月あった」しみじみと熅つぶやく暮れのスーパ  
片付けは僕がするつて言つたけど忘れたふりしてドラマ見ている

わたくしという多面体 川田 ゆかる\*大阪

榧の実 山添 聖子\*奈良

ケーキ屋のサンタの衣裳の色落ちがライトに浮かぶ聖誕祭前夜  
携帯を雪ひとひらがタツプする待ち合わせする映画館前  
要領をえずに少しの遠回りこれこそ旅の醍醐味として  
生きてきた日数分が集まってわたくしという多面体あり  
ほどけてる靴紐を結びなおすのもタイミングが長い通路で

大松 達知選

どんどろけ 川村 ら\*鳥取

お、来たな。 八木 かおり 奈良  
熱下がる 夜更けの窓に月明かりありてふうふう息をつきたり  
北寄りの風やや強くペランダにいそひよ見え遠きさへづり  
どの角を曲がつても山裾わり居るふるさと奈良の盆地の暮らし  
待ち合はせ五分前にはいつもるて手を振りながら向かひ来る母  
お、来たな。一陣の風駆け抜ける今年初めの生駒おろしよ

チベットスナギツネ 山添 葵\*奈良

六時なのに 中原 能理子\*山口

推している先生からの赤ペンの返事があつた学級日誌  
室町から江戸まで一気に駆け抜けた期末テストの前日の夜  
シャー芯が四回折れた試験中メネラウスの定理で解いてるとき  
二期期の幾何の点数見た父の顔はチベットスナギツネなり  
少しだけ厚底の真っ白いくつ母と2人でカフェへ行くとき

あちこちに隙間の育つ古き家息吸うごとく風はいり来て  
天気図は西高東低、列島に縦線五本、鳥取に雪  
雷神が雪よぶ声は(どんどろけ)重低音に家は痺れる  
おこわ蒸す湯気は庇を越えてゆく父の誕辰祝うがごとく  
憂い事ありて時々こめかみに角立つ欠けらひゆんと飛び来る  
濡れた道 轍の水に青映る空の切れ端落ちてきたごとく  
雨上がりパトカー二台過ぎたあと道にカラスが見送つており  
いつかこの目で見たいとぞ願いたる田中一村の前に立ちおり  
六時なのに夜になりけり星たちが慌てたように光り始める  
街の灯と落葉を踏んで自転車行くまた新しいビルが建ちおり